

# 有田焼 伝統の窯で磁器をつくる

— 深川製磁株式会社 —

職 場  
ル ポ

EMPLOYMENT REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



深川製磁株式会社

〒844-0005 佐賀県西松浦郡有田町幸平1-1-7

TEL 0955-43-2151 (代) FAX 0955-43-2799

■ 宮内庁御用達  
「透白磁」を特色に

「有田」といえば、だれもがその名を知る、日本有数の焼物の産地。町に入ると、次々と窯元の看板が現れ、直売会館や卸団地がある。著名な窯も多い。

有田焼は、江戸初期に陶工李参平が有田泉山に陶石を発見したことに始まる。日本の磁器発祥の地で、鍋島藩の統括のもと、「伊万里焼」として世界に輸出された。それらは現在、「古伊万里」と呼ばれている。

町の中心に、クラシカルな外観の深川製磁株式会社本社がある。創業は一八九四年。木造の工場入口に、風格ある「宮内庁御用達」の看板が立つ。創業者深川忠次は、一九〇〇年のパリ万国博覧会に「真っ白な白磁」に絵付を施した数々の作品を出品し、最高賞を受賞した。その



管理本部  
山口幸助総務部長

ときから今日まで、深川製磁は「気韻ある透白磁」を特色としている。

和洋食器、花瓶、美術工芸品などの、輝く白磁に澄んだ青が映える染付、しつとりと深みのあるルリ色、あざやかな赤絵で装った染錦……。製品の気品と優雅さ、格調の高さは、陶磁生地を一、三五〇度の限界温度で焼成する「とんぼ窯」から生まれてくる。

従業員は二七八名。そのうち障害のある人は六名で、五名は勤続二十五年以上というベテランだ。

まず西有田町にある「チャイナ・オン・ザ・パーク」を訪ねた。一九八九年、工場に隣接した敷地内に、創業者の名を冠したギャラリー「忠次館」と、フランス料理のしゃれたレストラン「究林登」、アウトレット商品を販売する「瓷器倉」がオープンした。ここでは、焼物づくりの歴史を知り、深川製磁の器で料理やコーヒーや紅茶を味わい、買い物を楽しむことができる。手入れが行き届いた、心地よい空間だ。

管理本部総務部長の山口幸助さんの案



高級品の花瓶等の上絵付を担当する川尻信二さん

内で、最初に工場を見学する。焼物のうち、陶器は土、磁器は石が主原料だ。磁器の製造工程は、石を粉末にして水を加え、土をつくることに始まり、成形、素焼、下絵付（染付）を経て、釉薬をかけ、一、三五〇度の高温で一三時間かけて本焼をする。その後、上絵付をして、八〇〇度の錦窯で六時間焼き付けてできあがる。それぞれの作業を、熟練の職人たちが分担している。

「二人がさまざまな作業をマスターするよりも、一つの作業のベテランをめざしています。そのほうが、会社としても本人にとってもプラスになると思いますが」

説明を聞きながら、上絵付の作業場へ向かう。

ベテランの職人として  
活躍中

数十万円もするという花器や壺の上絵付の線描き作業を、息をこらして見つめる。

「六〇万円の壺が百貨店で売れることもありません。お客様に深川製磁のブランドとして選んでいただいております」と山口さん。

川尻信二さんは、その線描きを担当する三人の職人の一人。入社して二十八年、現在の仕事について六年になる。川尻さんは、高校生の頃から焼物づくりが好きで、深川製磁への入社を決めた。

「焼物をつくる仕事ができたらいいな」と思っていましたから、希望の職種です。長年、染付をしていましたが、上絵付の方が定年退職されることになり、その後任として担当することになりました」

本焼を終えた大きな花器に線を描く。焼き付けると、金色になる。

「ポイントは、絵の具の管理です。暑いときは絵の具が乾燥しやすく、湿度の高いときは絵の具が走りにくいとか、湿度や湿度を考慮して、常に一定の状態を保つようにしています。また、絵柄が一つひとつ違いますので、絵柄を覚えるま



西有田工場では3名の障害者が働いている



で時間がかかります」

川尻さんは両下肢が不自由で松葉杖を使っているが、車いすマラソンにも出場する行動派だ。

「製作物を少し動かしたりすることは自分でしますが、大きなものを運んだりするときは手伝ってもらいます」

日々描くのは、販売価格にして二五万〜六〇万円の、高価なものばかり。川尻さんが描いた花瓶は、小淵首相がローマ法王を訪問したときに記念品として贈られた。

「描き方の濃淡で、焼き上がりの状態が違いますので、そこがむずかしいところですね。会社の仕事としてはいろいろなものを描いてみたいですし、個人的には、ろくろを使って陶器をつくってみたいですね。自分の焼物にも挑戦したいと思います」

同じ部屋で、本焼した器の上に転写シールを貼る作業をしているのは、山口珠子さん。六二年に入社して以来、転写の絵付一筋。耳が不自由だが、コミュニケーションに不自由はない。

「まわりのみなさんは、心遣っていると思います。いままでにトラブルはありませんし、コミュニケーションはよくとれていると思います」と山口さん。

そのすぐ隣で、小嶋裕二さんが染付が終わった器をケースの中に並べている。六八年に入社した勤続三十五年のベテラン。知的障害があるが、仕事はりっぱに一人前。手際よく、ゴミなどがついていないかもチェックしている。器を次々とケースの中に並べ、そのケースを背の高さほどまでに台車に積み上げていく。

取材日の一カ月前に完成したという窯で、染付や上絵付を終えた器が入ったケースが、目を凝らさないとわからないくらいの速度でゆっくりと動いている。コンベアが一周する間に、八〇〇度の熱で約六時間焼きつけ、完成する。

「製品になるまでに五、六工程ありま



上絵の一つである転写シール貼り作業を進める山口珠子さん

すが、生地、染付、上絵付の前、焼き上がった後と何回も検品をしています。アウトレットで販売している格外品でも、検査は非常に厳しくしています」  
アウトレットの「盗器倉」で販売されている商品を見ても、素人目にはどこが格外品だか、わからなかった。

### 特別扱いはしていません

レンガ造りのギャラリ「忠次館」には、秘蔵コレクションや歴史を伝える品々、皇室に上納した器の参考品が展示されている。花器、壺などの最高級品が並び、和洋食器などの販売も行ってている。館内は現代的なデザインでありながら、木をふんだんに使った、落ち着いた空間だ。二階の喫茶コーナーで、お話をうかが



作業済みの製品の整理・搬入作業をする小嶋裕二さん。製品の取り扱いには細心の注意を払う

った。総務部長の山口さんは、昨年九月から障害者雇用の担当になった。  
「長い人は四十年勤めています。伝統産業は熟練を重要視します。線描きも、十年二十年しないと、一本の本当の細かい線は引けないと言われています。器を縦にして線を引くのはとくに熟練が必要です。障害のあるなしに関係なく、みな、この職種を好んで入ってきますね」  
山口珠子さんの勤続四十一年を筆頭に、勤続年数は長い。  
「各職場には責任者がいて、常にコミュニケーションをとっています。特別扱いはしていませんし、心は通いあっていると思っています。お正月に忠次館での始業式の後、モチツキ大会などのイベントをしています。障害がある人たちも積極的に参加しています」

知的障害者も、いわゆる「雑用」ではなく、製造現場に入っている。

「知的障害者も、特別に扱うことはありません。清掃などで働いてもらうことは、初めから考えていませんでした。どこまで仕事ができるかを見極めて、製造現場で戦力になるならという形で採用してきたと思います。長年仕事をしていいますが、責任のある仕事をするので、進歩があるのではないかと思います」

同席した佐賀県障害者雇用促進協会の伊東義文さんの推薦の弁。

「有田の規模の小さな窯元では障害者が働いているところが多いんですが、会社の規模がこれだけ大きくて、障害者をきちんと雇用し、宮内庁御用達の企業ということから、推薦させていただきました」



茶碗のふたの施釉ができるようになった山口晴美さん

## 本社工場でも「戦力」です

引き続き、有田町の本社へ。本店の高窓を飾る、富士山を描いた大正期のステンドグラス、隣接の本社工場に掲げられた富士山に流水の深川製磁のマーク、宮内庁御用達の看板、どれもが歴史を感じさせる。深川製磁では明治四十三年（一九一〇年）から、明治・大正・昭和・平成と、皇室、宮家の器を納めてきた。

「本社の正面玄関は三階建てですが、明治時代の建物をそのまま残しています。当時は有田の高層ビルとして有名だったそうです」

通りに面した建物群は、町並み保存が行われている。本社工場は、明治・大正時代に建てられた木造建築だ。当時の建物が現在も活用されているところがすごいが、ここでは三名の障害者が働いている。

「初めはやさしい作業から始め、工場の責任者が徐々に仕事をさせているようです」

一番の新人が、九八年入社  
の山口晴美さん。素焼した器をきれいにすることから始め



深川製磁製の品々（チャイナ・オン・ザ・パークで）

て、高台はぎ、箸置きや茶碗のふたに釉薬をかける施釉の作業もする。

「仕事は、きつときもおもしろいときもあります。箸置きの釉薬かけが好きです」

上司の古賀則正さんは、山口さんを励ましてきた。

「釉薬かけは、ドロドロした釉薬の中に素焼の器を入れますから、どんどん吸い込みます。一カ所に釉薬が固まらないようにとか、長く入れておかずにパッと上げるとか、釉薬をかけたらどこも触れないとか、むずかしい面がありますから、



素焼きした器の汚れを取り除く作業をする橋口ミツエさん

一定期間の訓練は必要です。箸置きの場合点まで一年かかりました。高台はぎはベテランで、自信をもっていますね。一生懸命に仕事をしています」

橋口ミツエさんは染付課に所属。素焼きした器の汚れを取り除いている。

「ここできれいにしておかないと、焼き上がりが汚れてしまいます」

百武真利子さんは入社後に、けがで足が不自由になった。器に型を当てて色を吹き付け、何回も型を取り替え、複雑な絵柄を描いていく。熟練が必要な作業だそうだが、余裕十分に見えた。

「新しい絵柄が変わるときが、慣れる

のに時間がかかりますね」

## ブランドで選ばれる企業に

深川製磁では自社のブランド名をもっと世の人たちに知ってほしいと、二〇〇〇年に東京の明治神宮宝物殿で展示会を開き、二〇〇一年にはパリ万国博覧会の受賞から百年を記念し、「深川製磁パリ展」も開催した。

「深川製磁のブランド力を高めて、皆様に知っていただき、ブランドで選んでいただけるようにと努力しています。東京の後に開催したパリ展も、ご好評をいただきました」

バブルの時代は大きい注文が相次いだり、経済の低迷で引出物などのギフト用品の売り上げは落ちていた。その反面、ちよつと高級な自分専用のカップでコーヒーや紅茶を飲むという、ささやかなぜいたくをした人は増えている。

「いままではセットでしか販売していませんでしたが、マイカップを持ちたいという嗜好の方が増えてきていますので、一つでもお売りするような体制をとっています。マイコレクションという形で、いいものを大事に使っていただければと思っています。百貨店での売り上げ



振り掛けと呼ばれる染付作業をする百武真利子さん

は厳しい状況ですが、直売ではこれからも伸びる要素はあると思います」

現在は、定年退職者の補充もしていない。

「厳しい経済状況ですが、企業の責務として、いままで同様、障害者の雇用はしていきたいと考えています。今後業績が伸びていく過程では採用も考えたいと思います」

私の手元にも、伝統の「フカガワブルー」のマイカップ。原稿をまとめていると、線描き、施釉と、伝統の器づくり

に励む「職人」たちの顔が浮かんでくる。